

蜂起の時節——アナキストに読まれるハイデガー

中西 淳貴

2023 年末、その闘争に終止符を打ったアントニオ・ネグリは、かつて小さな書評のなかでジョルジョ・アガンベンを厳しく批判していた。

例外状態が、生命やエコノミーの再生産空間にまで、そして何よりもそれらの公共的再生産にまで入りこんでしまったあと。この状況から脱けだすことはいかにして可能なのだろうか。[…]「無為」こそ、つねに例外的である権力による全体主義的奴隷化からの解放をもたらす倫理的道具であるとアガンベンが私たちに約束するものである。[…] しかし、(ここに強く響いている) ハイデガー的放下が、価値の道具に関連づけられ、あるいはさらに価値の道具に変換されないことなどあろうか。¹

労働と同時に、労働者主義からも逃れようとするアガンベンの「無為」は、資本主義的生産様式への抵抗としては無力であるどころか、積極的にそれを利するものであるとネグリはここで認定している。そして、その政治的無力を表現するために持ちだされるのが、「ハイデガー的放下」という概念であり、さらに言えば「ハイデガー的」という形容詞であった。

しかし、アガンベンにとって、この同一視それ自体は問題とならないだろう。そもそも、かれは哲学者としてのハイデガーへの一貫した敬愛を隠そうとしていない。それだけでなく、「政治についての覚え書き」と題された論考においては、ハイデガーの「固有化としての出来事 (Ereignis)」を一貫して高く評価したうえで、本質的な政治的問いの先駆者としてハイデガーの名を挙げてもいる。つまり、ハイデガーの思考は、アガンベンにとって政治的抵抗の文脈において有効であると積極的に評価されているのである。かくして、ネグリとアガンベンの対立軸のひとつは、ハイデガーの思考を私たちの政治的活動に導入するべきかどうかに対する評価であるということになる。

そして、近年の政治的運動におけるもっとも重要な問いのひとつが、それぞれが提唱するネグリの構成／アガンベンの脱構成という対照的な戦略の差異であることはよく知られているだろう。言うまでもなく、ここで問うべきは、ハイデガーに対する評価の差異と、こうした戦略の差異との関係である。しかし、こうしたことのしだいを理論的に論じる準備は、まだ整っていない。それゆえ本稿では、まず脱構成という戦略を実践しているアナキストた

1 Antonio Nagri, "Sovereignty: That Divine Ministry of the Affairs of Earthly Life", in *Journal for Cultural and Religious Theory*, vol. 9, no. 1 (Winter 2008), p. 99.

ちによるハイデガーの受容を精査することにしよう。そのことによって、いまだ明らかになっていない脱構成という戦略のもっとも基本的な枠組みを明確にすることができるはずである。この作業にあたって重要となるのが、ライナー・シュールマンによる『アナーキーの原理』(1982)²である。本書の「アナーキーなハイデガー解釈」をつうじて、アナキストたちは「ナチスの哲学者」ハイデガーを再発見したと言えるからである。この作業をつうじて同時に本稿は、シュールマンといういまだ日本語の読者には知られていない哲学者の思考の枠組みも描きだすことになるろう。

本稿の内容を予告しておけば、まず第一節で「ゲシュテル」と「放下」という概念をとりあげ、後期ハイデガーの基本的な議論を簡単に整理する。第二節では、そうしたハイデガーの議論をシュールマンがどのような点でアナーキーに解釈したのかを紹介する。そして第三節では、脱構成的アナキストがハイデガー＝シュールマンを受容するなかで、どのようにじぶんたちの実践をかたちづくっているのかを確認する。

第1節：ハイデガーにおけるゲシュテルと放下

さしあたり、後の議論に必要な限りでハイデガーの哲学を整理しておこう³。本稿が立ちいるのは、ハイデガー哲学のなかでも、後期と呼ばれる時期の哲学である。そのなかでもとりわけ、「ゲシュテル (Ge-stell)」と呼ばれることになる時代診断と、そこにおいて私たちにふさわしい態度として提示される「放下 (Gelassenheit)」について、基本的な論点を確認しておきたい。そのために本節ではまず、ハイデガーの「技術への問い」をとりあげる。

その小論は、技術との自由な関係を準備するために「技術とは何か」という問いを扱うものであった。そのなかでハイデガーは、「技術とは開蔵する (Entbergen) ありかたのひとつである」(GA7, 13)、つまり、存在者をどのようにあらわれさせるかというしかたのひとつであると規定する。そして、原子力に代表されるような現代的な技術について、そのありかたは「挑発 (Herausfordern)」であると主張している。具体的に言えば、現代技術の自然に対する「エネルギーを供給せよと要求を突きつけ、そのエネルギーをエネルギーとしてむしり取り、貯蔵できるようにする」(GA7, 15) というありかたがそれである。かつてヘルダーリンが詠ったようなライン川は水力発電のためのエネルギー源となり、ひとびとの目を喜ばせるライン川であったとしてもそれは観光産業によって挑発された「観光資源」にすぎなくなっている。

このようにして挑発する主体は、もちろん人間である。しかし、人間が挑発しているからといって、挑発するように決めた主体も人間であるというわけではない。ハイデガーにとって、「人間自身が、自然エネルギーをむしり取るようすでに挑発されているからこそ、この

2 Reiner Schürmann, *Le principe d'anarchie: Heidegger et la question de l'agir, diaphanesis*, 2013. 以下、本書からの引用については、略号 PA に頁数を付すことで引用箇所を示した。

3 以下、ハイデガー全集からの引用は、略号 GA に巻数と頁数を付して引用箇所を示す。

徴用する開蔵が生じうる」(GA7, 18) のである。そして、ハイデガーはこうした挑発するよう人間を挑発するはたらきを総称して「ゲシュテル」と規定する。人間は、ゲシュテルによって挑発するようにすでに挑発されており、そのことによって自然を挑発するにすぎないことになる。

そして、私たち人間がゲシュテルによってすでに支配されているという現状を、ハイデガーは「歴史的運命 (Geschick)」と呼ぶことになる。こうした解釈の前提として「存在史」というハイデガー独特の歴史の語りかたがあることを確認しておこう。たとえば「ヒューマニズム書簡」で「存在の歴史は、いかなる人間的条件や状況をも担いかつ規定している」(GA9, 314) と言われているように、存在がみずからを送り遣わす (schicken) しかたによって人間は規定されており、その与えかたの変転によって歴史が生成するというのが後期ハイデガーの立場である。そしてゲシュテルとは、この歴史の現代における段階なのである。

このように「歴史的運命」としてゲシュテルに支配された現代において、挑発された人間は自然を挑発しつつ、それと同時にじぶん自身をも挑発する。かつての友人たちと来し方を確認しあうことや、この世界で愛すべきひとを見いだすことも挑発されるべき資源となり、もはやそうした事態においてじぶんが挑発されていることすら認識できなくなってしまう。ただしハイデガーは、ゲシュテルという運命のなかに、「最高の危機」を見いだすだけでなく、同時に「救い」も見いだし、「救うものは技術の本質のなかに根を張って育つ」(GA7, 30) と述べる。ハイデガーは、こうしたゲシュテルがもつ両義性を強調しながらも、この論文の内部で「救いを育む」ありかたについて具体的に論じることはなかった。

さしあたりハイデガーが、こうした「救い」という論点について語りだすさいに導入するのが「放下」という概念であった。「放下」と名づけられた講演で、ハイデガーはふたたび原子力や現代技術がもたらす惨状について論じる。その語り口は、「技術への問い」よりも絶望的な響きを帯びる。しかし、終盤になってかれは、この原子時代においてそこから人間の本質が新しいしかたで生いたつことができるような新しい地盤を探求しようと試みはじめる。そのなかで、あるべき技術との関わりかたが提示されることになる。ただ技術を呪詛したり、遠ざけたりすることは愚かであると述べたうえで、以下のように言われている。

私たちは、技術的諸対象の避けがたい使用に対しては「然り」と言うことができる。そして、それらの技術的諸対象が私たちを独占しようと要求し、そうして私たちの本質を歪曲し、混乱させ、最終的には荒廃させることを私たちが拒む限りで、私たちは同時に「否」と言うことができる。⁴

こうした同時の「然り」と「否」という態度こそ、ハイデガーが技術に対するあるべき関わりかたとして提示するものである。そして、ハイデガーはこれを「物への放下」と呼ぶので

⁴ Martin Heidegger, *Gelassenheit*, in *Gelassenheit*, Neske, 1959, S. 25.

あった。

第2節：シュールマンにおける「アナーキーの原理」

前節で簡単に確認しておいたハイデガーの哲学を、独自のしかたで解釈したのがライナー・シュールマンの『アナーキーの原理』であった。まずは、多くの人にとってまだ馴染みのないであろう本書の基本的な主張を確認することからはじめておこう。

『アナーキーの原理』の主張は、「理論と実践の関係についての問いをあらためて提起すること」(PA, 9)と要約される。ここで批判される理論と実践の関係とは、哲学的伝統から政治的行動まで一貫している〈理論から実践を派生させる〉という関係である。シュールマンがまず指摘するのは、理論から実践というこの派生的関係それ自体が、理論としての形而上学のうちに二重の由来を有しているということである。第一に、或る部分的な存在者についてのみ扱う特殊形而上学を、存在者を存在者一般として扱う一般形而上学によって基礎づけるという試みである。第二に、一般形而上学の内部で、ほかのあらゆる存在者を第一者によって基礎づけるという試みである。これによって、理論が実践を基礎づけるという両者の関係が規定されるのであり、この関係は行為論の内部で、行為をなんらかの原理に準拠させるという範型によって表現されることになる。つまり、あらゆる存在者をそこからして説明する原理の探究としての形而上学は、原理に行為を準拠させる企ての総体として位置づけられることになる。かくして、「理論と実践の関係についての問いをあらためて提起すること」は、行為を原理へと準拠させる形而上学を脱構築することへと向けられることになる。

シュールマンのこうした試みは、ハイデガー解釈という構えのなかで遂行されることになる。この試みが、形而上学を批判するハイデガーの思考とさしあたり適合的であることは明らかだろう。そして、この思考の布置を最大限に活用するために、シュールマンが外挿するのが、タイトルにも採用されている「アナーキーの原理」という概念である。明白に対立する「アナーキー」と「原理」というふたつの概念を繋げることで活性化されるのは、まずはハイデガーの時代診断である。そして、ここでのシュールマンの賭け金は、この時代診断を活用して形而上学の外部で「何をなすべきか」という古典的な問いに答えることである。そうすることでまた、ハイデガーの思考が、「何をなすべきか」という政治的な問いに答えるものとして活性化されることにもなるのである。このしだいを把握するためには、「アナーキーの原理」という概念について理解せねばならないだろう。

まずは、「原理」という概念についてあらためて確認しておこう。さしあたり「原理」とは、そこからしてあらゆる存在者を普遍的に説明するべきものである。しかし、シュールマンにとって「原理とは、或る共同体にとって、そこからしてその共同体がそれと認められるような事物、行動、言葉の有限な布置が実現される「空け開け」をつくりだす」(PA, 50)ものである。すなわち、原理は或る共同体にとって事物、行為、言葉がそこに準拠するものであるが、それはあくまで或る共同体に妥当するものであって普遍的なものではないと認定

されている。そしてシュールマンは、或る時節においては或る原理が支配するというかたちでハイデガーの「時節 (Epoche)」という概念を導入しながら、これまでの歴史、とりわけ西洋形而上学の歴史としての「存在の歴史」を、そうした原理の転換・時節の転換として描きだすことになったのである⁵。

ただし、『アナーキーの原理』において重要な論点のひとつは、これまで転換し続けた原理というもののそれ自体が衰退しているという時代把握である。たとえばこれは、ハイデガーにおける「形而上学の超克」という論点の解釈から引き出されている。「形而上学という時代の終わりとともに、私たちの歴史のあらゆる時期に思考と行動を秩序づけてきた「時節的諸原理」が衰退している」(PA, 14)⁶。そして、こうした時代把握が、ハイデガーのゲシュテルに対する両義的態度のなかに位置づけられることになるのである。

ハイデガーを解釈するシュールマンにとって、現代の時節的原理を思考する出発点は、やはりゲシュテルである。そして、このゲシュテルこそ、危機をもたらすと同時に、「存在の本質の忘却が変転するような転回の可能性」としての「救い」の可能性を含んでいるのであった。このことから、シュールマンは、ゲシュテルという「最後の時節的原理には、諸時節を区別するのとはまったく異なる転換の可能性が対置されている」(PA, 215f.) という解釈を引き出す。こうして、これまでの形而上学の歴史内部で生じてきた諸原理の「転換」に、「まったく異なる転換」としての「転回」が対置されることになる。そして、「形而上学は時節的原理によって統御されるのであり、ポスト形而上学はアナーキーである」(PA, 64) という記述からも明らかであるように、転回とは原理からアナーキーへの転回にほかならない。

ただし、あくまで現代は、いまだアナーキーが到来しているわけではなく、衰退しつつある原理、原理を衰退させる原理が制御する時節である。この両義的な時節において、シュールマンはこの著作のタイトルとして「「原理」と「アナーキー」というふたつのことばを併置することによって、この時節的移行を準備しようとする」(PA, 15)。そこにおいて意図されているのは、「アナーキーの原理」ということばによって、衰退しつつアナーキーへ向かうという現在の原理に基づいて、ゲシュテルという現在の時節がもつ両義性を表現しなが

5 さしあたりここでは、前期フーコーの考古学的作業を念頭におけばよい。シュールマンも、原理のほうか知の秩序よりも外延が広いと主張しつつも、その近接性を指摘している。また、これまでの歴史は、「形而上学以前の曙光、形而上学を創設する反転、今日可能であるポスト形而上学的時代への推移」(PA, 171) という三契機によって整理されている。

6 この時代診断については、さしあたりハイデガーのそれを引き継いだにすぎず、社会科学的裏付けなどを欠いた独断的なものである。シュールマンなりの論拠としては、おおきくふたつのものが挙げられている。第一に、ハイデガーのみならず、マルクスとニーチェもこうした原理の終わりを指摘していたと解釈されうるといものである。第二に、原理とはそれが支配する時期には問われることなく妥当するにもかかわらず、ハイデガーが「形而上学の超克」を指摘するなど問いに付されており、その事実が原理の衰退を表現しているといものである。ただし、この点については、第3節の議論を参照のこと。

ら、現在まさに到来しようとしているアナキーに応答することなのである。

こうしたプロジェクトをもつ『アナキーの原理』において、「何をなすべきか」という問いは、「アナキーへの応答はいかにして可能か」という問いとして表現されることになる。先に確認しておいたように、シュールマンにとって形而上学とはなにより、行為を原理へと準拠させる企てであった。それゆえ、「形而上学の終わり」の時節としての現代に、行為は原理への準拠から解放されることになる (cf. PA, 126)。そして、こうした原理なき行為の範例として、ハイデガーのいう放下があらためて導入される。このとき放下は、来るべきアナキーを来るが「ままにする (lassen)」人間の行為として特徴づけられている。そのことによって放下は、原理とアナキーが共存する時節である現代において、アナキーに応答して、それをもたらそうとすることで、「時節的諸原理に対する闘争」を意味することになるのである⁷。

そのような「原理を無効にする行為」(PA, 360) として導入された放下に、シュールマンはいくつかの規定を与えてゆく。まず、ハイデガーのシレジウスからの引用に注目することで、放下がもつ「何故なし」という側面を強調することで「無目的」という規定が与えられる (cf. PA, 114; 342f.)。時節的原理が行為に意味と目的を与えるものとされている以上、そこからの離脱をはかる放下が、無目的なものとして描きだされることは容易に理解されるだろう (cf. PA, 14)。

しかし、こうした放下解釈は、一見するとたんなるカオティックな衝動的行動を言祝ぐだけにも思われ、冒頭でふれたネグリの批判が懸念するとおり政治的実効性をもたないようにも見える。ここで、シュールマンが「純粋で単純な無秩序という普通の意味でのアナキー」(PA, 405) を批判していることに注意しておこう。シュールマンはアナキーを語る一方で、「閉域の時代に、無責任であることとは、脱構築された現前である数多的到来に反することである」(PA, 381) と述べることで、放下を「責任」として描きだす。つまり放下は、アナキーへの移行の準備として、原理を無効にする行為でありながら、アナキーに応答して転回をもたらす行為として、無秩序や無責任から区別される行為なのである。こうして、無秩序や無責任ではないという放下の第二の規定がなされる。

そして第三に、アナキーへの移行を準備する放下は、個人的なものではありえないことが強調される。シュールマンは「放下が形而上学的閉域の闘において、時節的諸原理との闘争を本質的に意味するならば、それが純粋に個人的な課題であるということなどだろうか」(PA, 350) と提起する。ハイデガーも述べる通り、放下が原子力に代表される「技術的世界に対する同時の「然り」と「否」という態度」⁸であるならば、「孤独で英雄的に選択された態度」に基づく個人的闘争など「ドンキホーテの闘争」にすぎないことはたしかだろう

⁷ たとえばミゲル・アバンスールも、『アナキーの原理』がもつ政治的可能性に注目しており、あわせて参照されたい。(ミゲル・アバンスール「野生のデモクラシー」と「無始原の原理」『国家に抗するデモクラシー』山下雄大・松葉類訳 (法政大学出版局、2019 年))。

⁸ Martin Heidegger, *Gelassenheit*, in *Gelassenheit*, Neske, 1959, S. 25.

(PA, 351)。私たちは放下として、「必然的に集合的」であり「技術に対する「自由な関係」をはじめめる学習」(PA, 348)をしなければならないと主張されるのである。

シュールマンは、『アナーキーの原理』において、以上のようなハイデガー解釈を提示することになった。この解釈がすぐれているのは、まさに政治的にハイデガーを解釈することをつうじて、ゲシュテルの危機と救いという論点を読みかえるだけでなく、ハイデガー自身の記述では抽象的なままであった放下に対して、責任や集団性といった規定を明確に与えることで、ハイデガーの思考を推し進めたことにある。では、ハイデガー解釈から離れた政治的領域において、シュールマンによってアナーキーへと換骨奪胎されたハイデガーの思考は、どのような意義をもつのか。節をあらためて、脱構成的アナキストたちにとって、これがどのように活用されることになったのかを確認してゆこう。

第3節：脱構成的アナキストにおける蜂起とコミュン

まずは、以下の報告を確認することからはじめよう。

たとえば 2019 年だけを見ても、フランスのジレ・ジョーヌ、香港の民主化デモはもちろん、プエルト・リコやチリ、エクアドルやレバノン、あるいはイラクでも、きわめて激しい反乱が生じている。[...] あるジャーナリストは、同年のうちに数万人から数十万人規模のデモが生じている国として、以上のほかにも、ベネズエラ、ボリビア、韓国、スペイン／カタルーニャ、アルジェリア、エチオピア、スーダン、エジプト、イラク、イギリス、インドネシア、ロシアを挙げている。[...] /2020 年以降、コロナ禍という中断はたしかにあった。[...] そのさなかでさえ、アメリカ全土に広がったジョージ・フロイド反乱があったことを、われわれは知っている。[...] 2020 年内に生じた大規模なデモを視覚化したある地図を見るかぎり、人種主義や気候変動、あるいはコロナ問題に関連したデモを除いても、西欧と南米を中心に、惑星のいたるところで反乱が生じている。⁹

脱構成的アナキストたちは、こうした「蜂起的状况を、私たちの出発点として引きうけなければならない」¹⁰とかねてより主張してきた。そしてこうした主張が、シュールマンの思考によって基礎づけられているのである。以下では、脱構成的アナキストによる蜂起への定位という論点をめぐって「アナーキーの原理」との関係を確認しておこう。

9 五井健太郎「脱構成という共通の地平——ジョセップ・ラファネル・イ・オッラ『新たなパルチザンの形象』への導入」『HAPAX』II-1号（以文社、2023年）、21頁。また、以下で論じる蜂起への定位やアイデンティティポリティクスをめぐる論点については、本論考から多くを教わった。

10 The accused of Tarnac, “Spread anarchy, live communism”, in Jacob Blumenfeld(et al.), eds., *The Anarchist Turn*, Plute Press, 2013, p. 230.

脱構成的アナキストが、現状分析においてシュールマンを重視していたことは、以下の記述からも明らかである。

シュールマン [の『アナーキーの原理』] (1982) は正しくも、私たちの時代を深くアナーキーな時代、諸現象を統一する原理すべてが崩壊した時代と特徴づけている。アナーキーが、私たちの時節的状况を表現している。¹¹

シュールマン理解として厳密に言えば不正確な部分を含むとはいえ、さしあたりこの引用から明らかであるのは、シュールマンによる「原理の衰退」や「アナーキーへの転回」という『アナーキーの原理』の重要な論点が積極的に引き受けられているということである。

そして、キーラン・アーロンズとイドリス・ロビンソンは、シュールマンの思考を「私たちの時代において、先だって言語、行動、事物を現前の一貫した歴史的体制にまとめあげる結合的諸表象や、形而上学的な第一者である諸アルケーが衰退していることを確認した」¹²と要約しつつ、従来の政治運動に対する批判を展開する。そこでは、アルケーの衰退、原理の衰退という論点から、なんらかの原理としてのアイデンティティに基づく政治的主体の構築といった従来の政治運動（アイデンティティ・ポリティクス）が批判されているのである¹³。たとえば、トロンティを挙げながら、労働者というアイデンティティに基づく革命運動がもはや失効していることも言及される。

他方で、「蜂起はいかなる時、どんな理由からでも、いかなる場所でも生じうる」¹⁴とみとめられているように、脱構成的アナキストたちにとって、個々の蜂起はつねに特異な原因を有するものである。そして、かれらが「「人民」が蜂起を生みだすのではない。蜂起こそが「…」蜂起みずからの人民を生みだすのである」¹⁵と語るときに意味されているのは、蜂起においては、もはや闘争の原理としての労働者などといったアイデンティティが蜂起の原因として機能してはいないということである。そこでは、なんらかのアイデンティティに基づく人民たちが、蜂起を生みだすというモデルが批判されている。こうして蜂起が肯定されたのちに、「私たちは散発的な諸反乱と同時代なのではない。知覚されないままにそれらの諸反乱を交流させあう、唯一にして世界的な蜂起の波と同時代なのである」¹⁶とかれらが主

11 The accused of Tarnac, op. cit., pp. 225-226.

12 Kieran Aarons and Idris Robinson, "Introduction: Three Registers of Destitution", in *The South Atlantic Quarterly*, vol. 122, no. 1 (January 2023), Duke University Press, p. 4.

13 シュールマン自身、「行動を正当化する規範的言説を打ちたてることを許すものなど何もない」(PA, 105) や「転回とともに、政治的行動に基礎を保障することは、文字通り思考不可能になる」(PA, 123) と踏みこんで述べつつ、ブルードンのような古典的アナキズムすら原理を権威的なものから理性的なものにすげかえたにすぎないと批判していたのだった。

14 Comité invisible, *À nos amis*, La Fabrique, 2014, p. 11. (不可視委員会『われわれの友へ』HAPAX 訳(夜光社、2016年)、7頁)

15 Comité invisible, op. cit., p. 43. (不可視委員会『われわれの友へ』、43-44頁)

16 Comité invisible, op. cit., p. 14. (不可視委員会『われわれの友へ』、10頁)

張するとき、前提されているのは、蜂起を現在の時節の表現として把握することである。であるからこそ、散発的な蜂起がひとつの波として捉えられるのである。つまり、アナーキーの原理を私たちの時節の原理としてみとめるならば、それに応答するにはアイデンティティ・ポリティクスではなく、蜂起でなければならないのである。

こうしてハイデガーのゲシュテルという現状把握は、シュールマンによってアナーキーの原理の時節と解釈されたうえで、脱構成的アナキストたちの「蜂起の時節」という現状分析に流れこんでいる。では、シュールマンがアナーキーへの転回の準備として位置づけていた放下は、どのように把握されなおすだろうか。かれらはこの基本的な枠組みを受容しつつ、そこであらためて、放下に帰される「技術的世界に対する同時の「然り」と「否」という態度」としての規定へと立ち戻ってゆく。

まず「否」という側面について、まずは脱構成的アナキストたちが、ハイデガーの預言的なサイバネティクス批判を引き継いでいることを指摘しておこう¹⁷。たとえば、脱構成的アナキストの理論グループであるティクーンや不可視委員会は、フーコーが分析したような人口を統治する技術としてのエコノミーがもはや失効したと認定したうえで、そこに新たな統治の学としてのサイバネティクスが採用されていると主張する。そこでは人間の行為は情報に還元され、その情報の流れを制御することで、行為を誘導・予測するだけでなく、統計的に確率をとることで行為の蓋然性に先だってはたらきかけるというしかたで統治がなされていると分析される。そして、GAFAをはじめとするグローバル企業が、サイバネティクスを社会環境としてのインフラストラクチャーにまで高めることによって、あらゆる人間が情報のフローのなかに取りこまれる¹⁸。ティクーンが「サイバネティクス化の進展を妨げ、〈帝国〉の均衡を奪うことは、パニックを引き起こすことによってなされるだろう」¹⁹と論じていたように、パニック＝蜂起とは、何よりもまずこうしたサイバネティクスの統治に対する「否」としての破壊・脱走としてなければならない。

こうしたサイバネティクスによる生の全面的統治に象徴される現代的技術というものを破壊するプログラムが、明らかにシュールマンも意識しながら、以下のようにして提示されているという点も注意しておこう。

それが対象とするのは、[...] 領土ではなくひとつの世界に住まう技術を練りあげる
ことである。さまざまな現前のエコノミーやさまざまな〈生の形式〉における遊動を練

17 たとえば、サイバネティクス批判を論じる箇所では「ここにかかわってくるのが、今日の革命運動の盲点である、かの有名な「技術への問い」である」(Comité invisible, op. cit., p.122. (不可視委員会『われわれの友へ』、123頁))と述べられている。

18 Comité invisible, *Maintenant*, La Fabrique, 2017, p. 47.

19 Tiquun, “L’hypothèse cybernétique”, in *Tout a failli, vive le communisme!*, La Fabrique, 2009, p. 305. (ティクーン「サイバネティクスの仮説」HAPAX 訳、『HAPAX』6号(夜光社、2016年)、50頁)

りあげることをつうじて、あらゆる装置の転覆と清算がもたらされるのである。²⁰

やや独自の術語が多いとはいえ、統治のインフラストラクチャーとして機能する「装置」の転覆と清算が「ひとつの世界に住まう技術を練り上げること」によってなされると主張されていることは読み取れるだろう。すなわち、ここで現代的技術を否定してもなお肯定される技術がみつめられているのである。

こうした技術こそが、「否」と同時に言われる「然り」という側面を構成している。それは、既存のサイバネティクスのインフラストラクチャーから離脱したかたちでのオートノミーの構築として表現されることになる。井戸を掘って水源を確保し、コンポストや浄化槽を設置することで上下水道は不要になる。薪のボイラーを使えば、ガスを引くことも不要となる。いくらでも余っている耕地を再生したり、山菜などを採集することで自身と都市の友人たちの食糧を確保する。その分野では、既存の流通網も不要となるだろう。家を建てるのはそれほど難しいことでもないし、熱源を確保すれば電気も賄うことができる。これらすべてには言うまでもなく技術が必要となる。そして、このようなじぶんたち自身のインフラは、蜂起において流通がストップした際に、それを継続するための力能も意味しているのである。

それに加えて、蜂起のさなかでの技術の使用法というものもありうる。催涙ガスやペッパー・スプレーを用いた警察の弾圧に対抗するための服装の選択という基本的なものから、2019年から2020年にかけての香港の蜂起でみられたような、即興的な組織化のためのテレグラムの使用や、警察からの逃走に協力した大都市のタクシー網に至るまで、そこにあるのは技術への問いである。こうした香港での使用法は即座に共有され、ジョージ・フロイド叛乱のなかで実際に用いられることになった。それゆえ、五井健太郎がユク＝ホイの議論を引き継いで強調するように、「沖縄警察署前にありえた宇宙技芸とは何なのか」²¹、つまり蜂起における技術の必然的使用はいかなるものかが思考されねばならないことになる。

脱構成的アナキストたちは、放下をこうした技術に対するふたつの側面をもつものとして、きわめて具体的に解釈している。そして、放下はもちろんシュールマンが語ったとおり、集团的なものでなければならないだろう。そして、その集团的実験の呼び名として、かれらは「コミュン」という形象をふたたび導入するに至るのである。それが復古主義的な自然派から区別されるのは、アナーキーへの移行に応答するという責任を引き受けているからである。コミュンは、私たちの時節の表現である蜂起から、技術に対する放下を集团的に思考し続けるだろう。以上のように、アナキストたちはシュールマンを経たハイデガーの思

20 Tiquun, “Une métaphysique critique pourrait naître comme science des dispositifs …”, in *Contributions à la guerre en cours*, La Fabrique, 2009, p. 120. (ティクーン「批判形而上学は装置論として誕生するだろう…」『反-装置論』『来たるべき蜂起』翻訳委員会訳（以文社、2012年）、75頁。）

21 五井健太郎「沖縄警察署前の宇宙技芸とはなにか——ニック・ランド『絶滅への渴望』から考える」『文藝春秋』2022年4月号、文藝春秋、110頁。

考に具体性を導入しつつ、応用的に実践を展開しているのである。

結論

最後に、シュールマンによる思考に対する行為の優越にかかわる「実践的アプリアリ」という概念にふれておきたい。「もしあなたが、これから私たちが話そうとする真理に適合していなければ、あなたは私を理解することはできません」というエックハルトの一節から、シュールマンは、「放下を理解するには、放下していなければならない」(PA, 343) という主張を導いた。本稿で扱ってきた放下に関するハイデガーと脱構成的アナキストの関係が、まさにこの概念を証しだてている。ハイデガーのテキストにおいては具体性を欠いていた「放下」は、シュールマンによって具体化されたうえで、それを実践してきたアナキストたちによって、より豊かな思考の可能性を与えられかえされることになったのだから。

まとめよう。ハイデガーは、ゲシュテルの時代における放下について「必然的な使用」という技術との関係における基準を提示していた。シュールマンは、第一にアナキーへと移行するための「原理を無効にする行為」として放下を解釈したうえで、そこに責任や集団性という基準を付け加えた。脱構成的アナキストたちは、私たちの本質を荒廃させる技術が無効にする蜂起と、技術の必然的かつ集合的使用としてのオートノミーの構築をコミュニンにおいて生きることを選んだ。いずれにせよ、いかなる技術に対しても、個別の状況のなかでそれが「必然的な使用」であるかどうかを見きわめ続けるしかない。技術との関わりのなかで、そこに先だつ原理は与えられていないからである。このような原理をめぐる態度の差異こそが、憲法制定権力に範をとる構成という戦略に対して、脱構成という戦略が有するもっとも根本的な差異となる。とはいえ、原理はないが、無秩序ではない。無目的であるが、責任はある。相容れないとされてきた概念をみずからのなかでともに住まわせること。アナキーの原理という私たちの時節の名、それ自体がまさにそのようなものであった。すべてが、まだ始まったばかりである。